

## ・コペルニクスの春休み

ラフソデー

地球歴2690年、人類は既にその活動範囲を地球から数百光年の宇宙にまで広げていた。こうした変化の大きな環境や、高度に電子化された様々な社会的インフラストラクチャ、そしてシステムを人類の活動と自らを、より密接に融合させるため、人類はその進化の過程を自ら制御することを決断していた。いまや人の遺伝子には、人自身が作り出した多くの遺伝子コンポーネントが組み込まれ、親から子へと受け継がれている。とりわけ、インターフェイスコンポーネントと呼ばれるものは、人間が本来持つ五感を拡張し、外部の電子機器との間で直接的なコミュニケーションを可能とするものだ。これによって実現される電子的な拡張現実(AR)は、人の生活や活動において不可欠なものとなっている。つまり、大昔の人たちが行っていた、ディスプレイを見ながらキーボードやボタンを操作するという作業は、物理的な操作から、仮想もしくは拡張現実によるコミュニケーションに変わり、その精度や速度が大幅に改善されている。たとえば、日常生活で使う多くの機器の操作も、汎用の家庭製品用インターフェイスによる拡張現実を使って行われるし、今ではほとんど自動運転の車を、郊外でマニュアル運転するような場合に使われるVDI(バーチャル・ドライビング・インターフェイス)さらには航空機や宇宙船を操縦するためのVPI(バーチャル・パイロット・インターフェイス)のようなものだ。ただ、いくつかの理由から、これらはいくつまでも人間がもともと行っていた物理的な動きを仮想現実置き換えたという域を出ていない。つまり、念じれば動くといった、いわゆる超能力みたいなものではなく、あくまで、実際の動きを仮想化したものなのである。もちろん技術的なハードルもあるのだが、それ以上に人間自身が雑念を完全に払えないため、こうした抽象的な思考による操作は、常に誤動作の危険をはらむ。そういう意味では、どれだけ遺伝子工学が進歩しても、人格、つまり人としての本質は変わっていないのである。一方で、こうしたインターフェイスを経由して、人体の様々な情報を取り出し、健康状態を調べたり、それらをフィードバックしたりする技術も発展している。これらは、VMI(バーチャル・メデイカル・インターフェイス)と総称されている。

恒星間航行を含む宇宙航行が不可欠になった現在、宇宙船の運航に不可欠な人材を育成する役目を担っているのが、スペースアカデミーである。アカデミー本校は、地球から太陽と反対方向に150万Kmほどの位置にあるL2ステーションと呼ばれる巨大な宇宙都市に置かれている。第2ラグランジュ点(L2)として知られるこの位置は、太陽と地球の引力に加えて軌道の遠心力がバランスするため、そこにある物体は常に地球、太陽との相対位置が変わらない。つまり、こうした宇宙都市を建設するのに最適の場所なのである。

教育機関としてのアカデミーは、一般の高校教育にあたる基礎過程から大学レベルの専門課

程、そして最先端の研究テーマに取り組み研究過程までの一貫教育校だ。そこでは、通常の高等教育に加えて、宇宙船のクルーとして必要になる様々な訓練が並行して行われる。基礎過程の二年目からは、実際にクルーを組んで小型の宇宙艇を飛ばす訓練も実施される。ここで、基本的な操船やそれに付随するいくつかの役割について基本を学んだ後、実際に役割ごとの専門課程に進んで、より実践的な教育を受けることになる。基礎過程は、一般の高校教育を兼ねており、どちらかといえば、そちらが主体であることから、附属高とも呼ばれている。

この物語は、そんな附属高に学ぶ学生たちの、ひとつのエピソードである。